

資質・能力の育成、学びの質の向上に向け、 多面的評価の推進を

多面的評価とは、どのように生徒を評価することなのか、従来の評価とは何が異なるのか。

次期学習指導要領に関する中央教育審議会の答申や、文部科学省から公表された「高大接続改革の実施方針等の策定について」などを基に、多面的評価の推進が求められることになった背景や、大学入試改革との関係などと合わせて、解説する。

多面的評価が求められる背景

資質・能力の育成を目的に 評価の観点を3つに整理

AI（人工知能）の発達やIoT（*1）の実現といった技術革新などの影響により、以前は想像もしなかった姿に社会は変わろうとしている。そのような予測困難な社会を生きる生徒が未来を切り拓いていけるよう、次期学習指導要領においては、「何を学ぶか」という、学習内容（コンテンツ）にとどまらず、それを学ぶことよって「何ができるようになるか」、すなわち「資質・能力（コンピテンシー）の育成」という視点

が明確に示されることになった。具体的には、「生きて働く知識・技能」「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等」「学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性等」の資質・能力の3つの柱である。

そういった資質・能力の育成を図るためには、前の学びからどのように成長しているか、より深い学びに向かっているかどうかなどを捉えていくことが不可欠である。つまり、学習評価において、生徒にどういった資質・能力が身についたか、実際の指導によって表出した生徒の変化や成長を見取り、生徒が次の学びに

向かえるようにする必要があるということだ。今後、各校には、資質・能力の3つの柱に基づいた指導と評価の改善を一体的に進めていくことが、ますます求められるようになる。

高校教育における多面的評価

多様な活動を通して 成長・変容を客観的に捉える

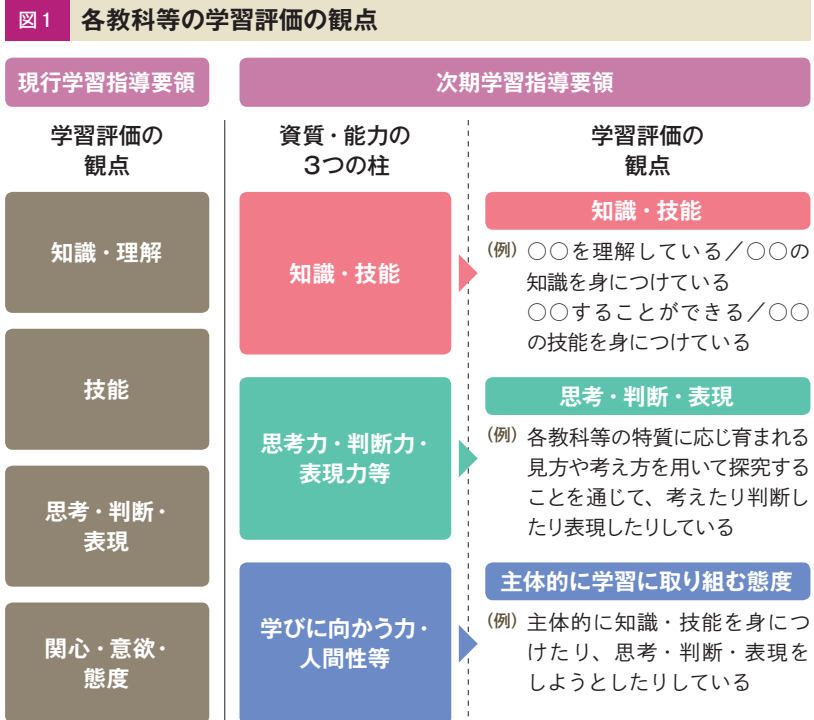
次期学習指導要領では、すべての教科等において、教育目標や内容を、資質・能力の3つの柱に基づき再整理することとしている。学習評価の観点もそれに応じて、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習

に取り組む態度」の3つに整理されることになる（図1）。

それら3つの観点については、毎回の授業ですべてを見取るのではなく、単元や題材を通じたまとまりの中で、学習・指導内容と評価の場面を適切に組み立てて行うことが重要である。特に、「思考力」や「主体的に学習に取り組む態度」などは内面的なものであり、可視化しづらいため、挙手の回数やノートの取り方といった形式的な活動の結果や単一の評価方法のみで評価が完結することがないよう、留意することが必要である。

また、教師からの評価だけでなく、

*1 Internet of Things の略。スマートフォンやパソコンだけでなく、様々な物に通信機能を持たせ、インターネットに接続したり、相互に通信したりして、自動制御や情報収集などを行うこと。



* 中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」を基に編集部で作成

生徒の自己評価や生徒同士による相互評価をすることも求められる。そうすることで、より客観的に生徒一人ひとりが自らの学習状況やキャリアを振り返り、自分の内にある可能性や資質・能力を認識することができる。それにより、生徒自身が学習の目標を持ち、方略を見直しながら学習を進められるようになるだろう。

変化を見通すことが難しい現代社会において、生徒一人ひとりに応じた資質・能力を伸ばしていくためには、校内の多様な活動を通して個々の生徒に成長のきっかけを与えながら、それぞれの学習の過程と成果を踏まえた指導が重要となる。その意味でも、中・長期的な視野を持ち、プロセスを含めた生徒個々の学びを把握する評価の開発と、それを校内

図2 多様な評価方法の例

パフォーマンス評価

知識やスキルを使いこなす（活用・応用・統合する）ことを求めるような評価方法。論説文やレポート、展示物といった完成作品（プロダクト）、スピーチやプレゼンテーション、協同での問題解決、実験の実施といった実演（狭義のパフォーマンス）を評価する。

ルーブリック

成功の度合いを示す数レベル程度の尺度と、それぞれのレベルに対応するパフォーマンスの特徴を示した記述語（評価規準）からなる評価基準表（下記はイメージ例）。

項目 \ 尺度	Ⅳ	Ⅲ	Ⅱ	Ⅰ
項目	……できる ……している	……できる ……している	……できる ……している	……できない ……していない

記述語

ポートフォリオ評価

児童・生徒の学習の過程、成果などの記録や作品を計画的にファイル等に集積。そのファイル等を活用して児童・生徒の学習状況を把握するとともに、児童・生徒や保護者等に対し、その成長の過程や到達点、今後の課題等を示す。

* 中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」の補足資料を基に編集部で作成

で共有する体制をつくること、すべての学校に求められていると言える。

多面的評価の方法

ペーパーテストに偏らない学習過程を含めた評価が求められる

生徒の学びを、そのプロセスを含めて評価するには、具体的にどのような方法があるのだろうか。例えば、

ルーブリックといった多様な活動に取り組ませ、その成果を評価する「パフォーマンス評価」はその一つである（図2）。従来のペーパーテストに加えて、そういった評価方法を併用するとともに、学期や年度といったまとまった単位で「全体を通してよかったこと（悪かったこと）」を見る総合的な評価のみならず、生徒一人ひとりが多様に学びをつくり上げていく過程を見る形成的な評価を行い、どのような資質・能力がどの

ように、どの程度伸びているのかを把握していくことも重要だ。そのためには、日々の学びや活動を個人で記録する、「ポートフォリオ」を充実させる必要があるだろう（P.5 図2）。

大学入試改革における多面的評価

多様な資質・能力を多面的に測る大学入試へ

高等教育、大学教育、大学入学者選抜を三位一体で改革する高大接続改革が進められている。2017年7月に公表された「高大接続改革の実施方針等の策定について」では、21年度大学入学者選抜から、「一般入試」「AO入試」「推薦入試」という従来の入試区分を、「一般選抜」「総合型選抜」「学校推薦型選抜」に改めるとされた。

一般選抜では、筆記試験に加え、「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」をより積極的に評価するため、調査書や志願者本人が記載する資料等の積極的な活用を促すとしている。総合型選抜、学校推薦型選抜においては、調査書・推薦書等の提出書類だけでなく、小論文、

プレゼンテーション、口頭試問、各教科・科目に係るテスト、「大学入学共通テスト」等のうち、少なくともいずれか1つの活用が必須化されることとなった。以上のように、これからの大学入学者選抜においては、どのような入試形態であっても多面的評価が推進される見通しだ。

さらに、資質・能力を適切に評価するため、18年度高校入学生から、調査書の様式が見直されることも明記された（図3）。具体的には、現行の様式から、「指導上参考となる諸事項」の欄が拡充され、時系列で6つの項目（①各教科・科目及び総合的な学習の時間の学習における特徴等、②行動の特徴、特技等、③部活動、ボランティア活動、留学・海外経験等、④取得資格・検定等、⑤表彰・顕彰等の記録、⑥その他）ごとに記載できるように分割される。また、裏表の両面1枚の制限を撤廃。

これまで調査書は3年生の学級担任が作成するケースが多かったと思われるが、今後は、3年間を通じた計画的な対応が求められる。

このように、生徒の希望進路の実現という面からも、多面的評価の推進は、現場にとって喫緊の課題と言

図3 新たな調査書のイメージ（案）

表面

裏面

指導要録に合わせて、現行の調査書の5、8、9の項目の順番を入れ替え。

調査書の様式について、裏表の両面1枚となっているが、この制限を撤廃し、弾力的に記載できるようにする。

大学が指定する特定の分野（例：保健体育、芸術、家庭、情報等）において、特に優れた学習成果を上げたことを記載することができる。

（注）「調査書記入上の注意事項等について」において、共通の注意事項として記載。

* 文部科学省「大学入学者選抜改革について」（2017年7月）の記載資料を基に編集部が作成

えるのではないだろうか。

eポートフォリオの活用で 高校・入試・大学をつなぐ

国公立・私立を問わず、各大学の入学者受入れの方針に基づき、受験者を多面的に評価するための入学者選抜改革の取り組みも進展している。「思考力・判断力・表現力」や「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」に関する評価がより重視されるよう、ICTを活用した「主体性等」を評価する一般選抜のモデルの開発がその1つだ(図4)。

例えば、文部科学省「大学入学者選抜改革推進委託事業(主体性等分野)」で構築・運営する、高大接続ポータルサイト「JAPAN e-Portfolio」は、高校生が学校の授業や行事、部活動などでの学びや、自身が取得した資格・検定、学校以外の活動成果を記録し、それを積み上げていくことでeポートフォリオとして情報を蓄積するとともに、将来的にはそのデータを大学入試時に利用できるようにするとしている。

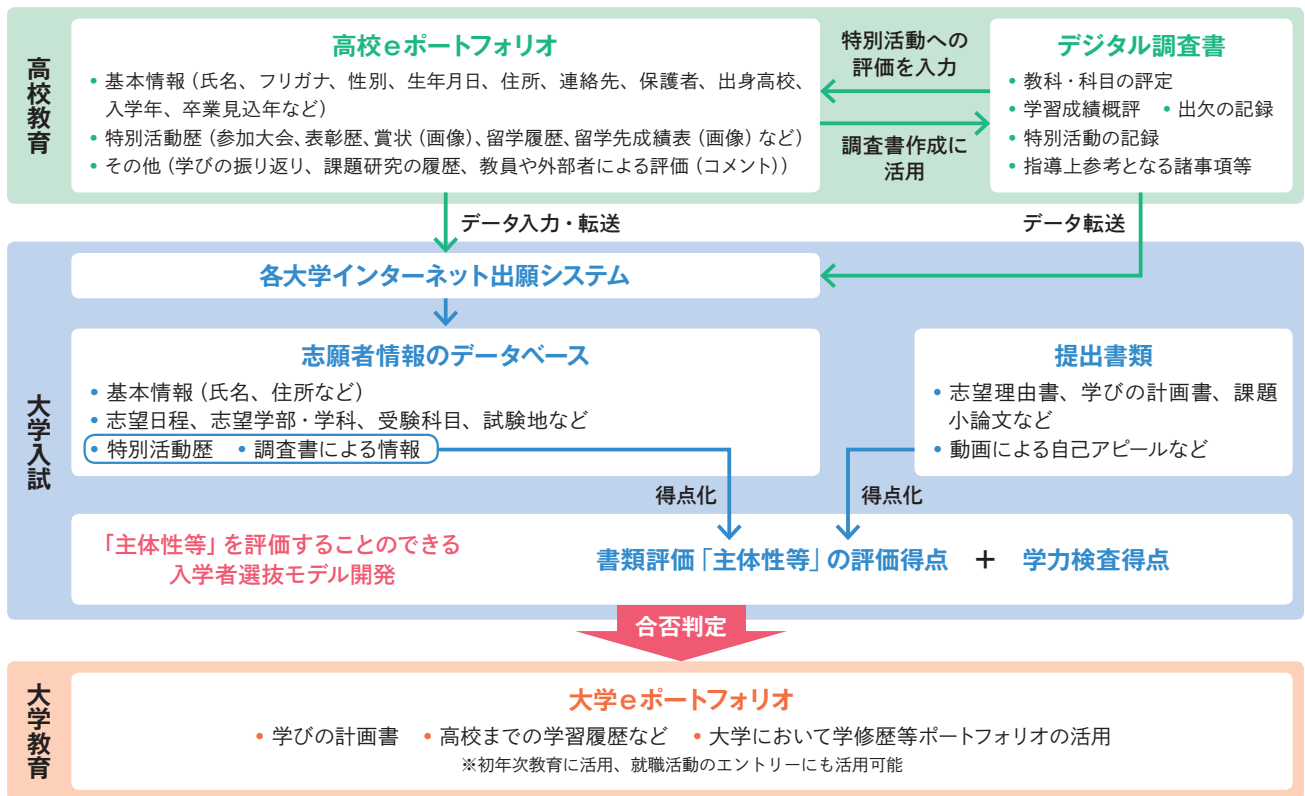
また、高校までの学習履歴等を大学教育における初年次教育に反映し

たり、大学での学修歴等を就職活動におけるエントリー時に活用したりすることも考えられている。紙ベースでの記録・保管に比べて、eポートフォリオは、情報の編集や統合が容易で、保存されたデータは劣化せず、写真や映像などの大容量のデジタルデータも記録できる。さらには、学校内外からのアクセスが可能で、これまでよりも情報共有がしやすくなる。高校3年間の指導について、不断の改善を図っていく上でも、生徒一人ひとりの情報や資料を効率・効果的に管理できるeポートフォリオの導入は、今後さらに加速するのではないだろうか。

*

ここまで見てきたように、生徒の資質・能力を適切に測る上で多面的評価の推進が必要であり、大学入試もその方向で改革が進められている。では、実際に多面的評価を推進・実践している教師は、多面的評価をどのように捉え、どのような点に留意しているのだろうか。次ページからの現場教師と識者の語り合いや、多面的評価に取り組んでいる学校の実践事例を通して見ていく。

図4 ICTを活用した「主体性等」を評価する一般選抜のモデル



* 文部科学省「高大接続改革の進捗状況について1」(2016年8月)を基に編集部で作成